

三度目の定年に思う

厚母 至眞子

二度目の東京オリンピック開催年に
「三度目の定年」を迎える
こんなにも長く働くとは思わなかった
もともとは怠け者の筈なのに
状況によっては意地になって頑張る性分

詩人になりたかった中学生時代
経済的に独り立ちしたかった高校生時代を経て
地方銀行に四年近く勤務した
充実していたが結婚の為に依願退職した

暇を持て余した新婚時代のアルバイト先は二ヶ所
夫の転勤に続き長男誕生
一才になった長男を姑に預けまたアルバイト
スーパーの衣料売り場でレジ係を一年間

そして十七万都市の市職員募集に応募
二才の長男を預けバスを乗り継ぎ通勤した
車の免許取得後は通勤もずいぶん楽になった
三十四年間の勤務後「一度目の定年」を迎えた

退職後の生活には経済的に不安があった
嘱託となり引き続き勤務生活
時代背景に助けられて同じ職場で働けた
そして五年間の勤務後「二度目の定年」

大幅に給料は減額されたけれど
余分に働いたのだ 五年間も
さすがに経済的にはなんとかなるだろう
不安は残るがくのんびり生活くの夢をかなえよう

しかし神さまはなかなかだ
二度目の定年から一ヶ月後
知人の紹介によりまた働くことになった
私立幼稚園の事務職だ

面倒から逃げたいのに状況によってはむきになる
そんな性格が原因したのだろうか 行き掛かり上
総ての事務を一人でやらなければならなくなった
助成金申請から給与計算等々決算までだ

この年齢になって初めての学校法人会計
面倒だけどひとつひとつやるしかない日々
もうじき「三度目の定年」を迎える
やっとなんかゆっくりの時間を過ごせるのだろうか

手加減無しに試練の波が連続して押し寄せた日々
今思い出してもなかなか手ごわい人生だった
それでも手を合わせる自分がある
人生は不思議で有難いと気づき始めたのだろうか